

団体と親密さ

鈴木まつり

〇はじめに

上京してから1年が経った。俳優としての活動に加え、自分で作品を書き、演出することを画策していた。仲間を集め団体として、何もわからないままではあるが動き始めていた。正解があるかもわからない今の世界で、歩み出すことを決めた。

現在の状況を鑑みて、制作のほとんどをオンライン上で行っていた。実際に、身体がふれるような距離で「出会う」ことができない中で共同していくということ。そこにしかない、それでしかできないことがあるのを捉えつつも、難しさを感じていた。その場所にいる、ということに目的を求められる状況は、当たり前のようにも異様でもある。

そのような中で、自分の表現したいもの、そして自分が抱く言葉への執着を確認し続けていた。団体の代表という立場に置かれた時、まず見つめるべきものは何かと考え始めた。自分が無視し消し去ろうとしている声があるのではと、不安になった。

〇活動にあたって

上記のような環境、思考の中でYoung Farmers Forum(YFF)という今回の活動に参加した。テーマとして「個人と団体」を掲げることにした。これらは二分することも、二項対立させることもできないと思う（個人は団体たりえるし、また、団体は個人の集団でもある）。しかし、その間には何か、ズレやわだかまり、のようなものがあると感じていた。以下でより詳しく考えてみる。

1, 個人の尊重について

表現者が表現者として、安心して行動するためには何ができるだろうか。団体としての活動の中で個人の意思が消えてしまうことはないのだろうか。

また、個人の尊重のためにはそれぞれの違いや個人のバックグラウンドをどのように捉えるべきなのか。例えば、出身地について。その地に生まれたということはその人のアイデンティティであると言い切れるのだろうか。コミュニケーションとは「違い」を確認していく営みであるのだろうか。

2, 個人的なものの表現について

言いたいこと、をひとに伝えるとき、個人の意思を維持したまま団体としての軸を保つことはできるのだろうか。その達成のためには何ができるか。それらをまとめる人間はそのような存在であるべきなのか。

また、そのような個人的なものはおもしろいものたりえるのだろうか。

パフォーマーが、表現したいことを、表現したいように、表現すること。団体としてのまとまりをとること。この二つが同時に達成されたとき、以上の疑問は晴れることになる。

○活動を通じて

YFFでは、Asian Performing Arts CampそしてFarm-Lab Exhibitionの創作過程、稽古の見学を行った。また、Farm-Lab Exhibitionについてはゲネプロの見学や上演当日の運営補助を行った。それぞれのプログラムにおいて、メンバーは公募により集められ初対面の状態からすべてが始まる。そこから共同してひとつのものを作り上げていく。

パフォーマーとディレクター、パフォーマーと観客、パフォーマーとパフォーマーそれぞれの関係性、そしてそれらを取り巻く環境がどのようなものであるか注目していた。

1, ガイドラインについて

東京芸術祭ファームのプログラムすべての応募フォームから性別欄は撤廃され、「自分に対して使用してほしい英語代名詞」を記入する欄が設けられていた。また、YFFとしての活動開始初日には、東京芸術祭ファームガイドラインが共有された。これには、差別・ハラスメント、他者の権利の侵害の禁止が具体例とともに明記されている。ガイドラインは一文一文声に出して読み上げられ、その重要性が強調された。

確かに、一度に頭に入れるのには情報量が多すぎるかもしれない。しかし、明文化されている、という事実があることが重要なのではないだろうか。何かしら疑問や居心地の悪さを抱いたとき、このガイドラインは支えになってくれる。

加えて、ガイドラインの存在により、正面からコミュニケーションにおける問題に取り組み、考えている人がいるのだと知ることができる。それだけで、おおげさな表現かもしれないが、救われる人間がいると考えている。少なくとも私にとってはYFFへの応募を後押ししてくれたものだった。

自己の代名詞の共有とガイドラインの存在は、参加者が安心して表現に専念する上で重要な役割を担っていたと言えるだろう。

2, Farm-Lab Exhibition 成果発表（ワークインプログレス）『unversed smash』

Farm-Lab Exhibitionは、様々なバックグラウンドを持つメンバーが集まり国際共同によってクリエイションを行うプログラムである。当日パンフレット「『unversed smash』コンセプトノート」ネス・ロケの言葉にも「制作過程において、個人的・政治的・文化的に異なる文脈を持つ身体間の『ラリー』や交流を探求する作品を設計することに興味があった。」とあるように、パフォーマー間の「違い」が意識された中で制作が行われているように感じていた。

稽古場ではパフォーマーの考えや、経験について話し合う場面が多くあった。このクリエイションのキーワードの一つである“assembly”について各々の調査を発表していた際には、それぞれの出身国について話すだけでなく、そのことについてパフォーマー自身はどう考えているのか、が強調された。今回のこの制作においては、パフォーマーをただその国の人間としてカテゴライズするのではなく、生まれ育ちという選択できないバックグラウンドにその個人がどのような態度をとり、問題意識を持っているかの共有がなされていた。そのような話し合いの達成には、ディレクションチームと表現者間の信頼関係が寄与していたように思う。繰り返されるコミュニケーションの中で、稽古回数を重ねるごとに全体の雰囲気や和らいでいくのを感じていた。積極的な自己開示にはリスクが伴うが、積み重ねられた関係性がそれを助けてくれる。また、稽古場に常駐し通訳を行っていたコミュニケーションデザインチームが、安心して発言できる環境の達成に寄与していた。

また、例え全体をまとめる存在があったとしても、パフォーマーひとりひとりが持つ個性は表れてしまうものである。細かい選択や、表情のひとつひとつ、そしてパフォーマンスにおいて使用されていた各個人の靴下がそれを象徴しているようだった。パフォーマーがディレクションチームによって一元化されることはない。むしろ作品全体の意図を捉え、彼らはより強いものへと変容していた。パフォーマー同士の繋がりも強化されていた。

3. Asian Performing Arts Camp 最終公開プレゼンテーション

本プログラムでは、参加者各々が問題意識やリサーチテーマを持ち寄り、それに基づいた最終公開プレゼンテーションが行われた。また、2名のファシリテーターによって参加者の協働が支えられた。

8名の参加者は興味関心によって3グループに分かれていた。発表には、生まれた土地に根付いた問題意識が現れる箇所や、普遍的なテーマでありながらも個性が押し出される場面がいくつかあった。しかし、その熱量に観客は抵抗を覚えることなく、言葉を、パフォーマンスを受け入れることができる。Zoomを使ったプレゼンテーションという特殊な形式にもかかわらず、個々人が表現したいことが伝わり、また全体としておもしろさが達成されていた。

これには、ファシリテーターの力が大きく影響していたように思う。3グループの発表順、映し出される映像、イラストの雰囲気ももちろんのこと、パフォーマーと観客間の、距離感を近づけるための工夫がされていたことが印象的であった。

パフォーマーの自宅の冷蔵庫が映し出される演出が序盤にあったことは、生活の共有のようだった。それは信頼の証にも似ている。「こちら」に生活があるように、向こうにも向こうの生活が、画面外のものがある。平面の共有ではなく、その奥にあるものを平面で見せるということが意識された。

常に、観客に寄り添い、構成が考えられていたように思う。定期的に入れられる休憩もそのひとつである。特に記憶に残っているのは、休憩中に映し出されていた画面だった。コーヒーが淹れられたり、魚が焼かれたりする映像とともに「自分が最高だと思える時にはカメラをオンに」の文字が表示されていた。また、オンにする場合もエフェクトの使用が可能であった。カメラをオンにすることが意味するのは、表情の共有だけではない。自分の生活の一部の公開も含まれているだろう。相互作用を考えながらも、強制しないということ。そこに、プレゼンテーションはパフォーマーだけではなく、観客のためのものでもあることが表れていた。

また、パフォーマー同士の強い信頼が感じられた。触れられる距離にいなくても、強い連帯を実現することができる。オンライン上においても他者と「出会う」方法はあるのだと希望を抱いた瞬間でもあった。

○まとめ

作品に関わる人、各々の間に「親密さ」があることが重要であると考え。それは、Farm-Lab Exhibitionにおける、ディレクションチームとパフォーマー間の信頼関係、Asian Performing Arts Campにおけるパフォーマーと観客間の生活の共有に通じている。また、ガイドライン、コミュニケーションデザインチーム、ファシリテーターのような、「親密さ」を実現できる環境を整備する存在が必要である。何でもない時間、を過ごすことが難しい現代において、状況を客観的に見つめられる第三者は団体の軸になるのかもしれない。

加えて、活動を通して感じていたのは、はじめに示したような自分の「問題設定」それ自体、正当なものでなかったのではないか、ということである。

これまで、団体活動の中で個人の意思が消されることに危険性を覚えていた。しかし、そもそも自分は自分の意思をうまく汲み取ることができるのだろうか。個人による個人の表現は、制限されていないと言い切れるのだろうか。Farm-Lab Exhibitionにおいて、パフォーマーが、自身の国における身体と言葉や習慣の関連性について語っていたとき、宗教などによる行動の制限が明らかになっていった（左手の使用、足の開き方など）。無意識に身につけている何かによって、自己の行動が狭められている可能性がある。これは思考ひいては表現にも当てはまるだろう。

また、自分が表現したいものを表現することが、その個人にとって一番に優先されるものなのだろうか。

『unversed smash』ゲネプロにおいて、オギと石田ミヲのペアでラストシーンが上演された。オギがミヲに接触するとき、身体が倒れてしまわないように支えて、それでいて確かめて、相手を思いながら共に倒れていく様をはっきりと覚えている。そこにあるのは、単なる興味からの接触だけではなく、対象への過度な思い入れでもなく、よりやさしく大きいものだった。個人の感情だけが、その人の表現を構成するわけではない。他者がいることはそれ以上の何かを発生させるのだと、うちのめされていた。

○おわりに

様々な活動や作品の鑑賞を通じて、書ききれないほど多くのことを学んだ。

自分が何の味方につこうとするのか、何に対し否定的な立場を取るのか、その時どのような感情を抱くのかを確認していくようだった。団体の主宰を担おうとする時、それ自体が持つ暴力性を意識することは確かに重要である。だが、恐れて行動を止めるのは、ともに歩むことを決めてくれた他の表現者の信頼を蔑ろにするのと同じだろう。覚悟と責任を持ち、進んでいきたい。

また、自己を国際という枠組みから見つめる中で、自分が立っている場所は無意識であっても何かしら意味を持つこと、発する言葉はこれまで生きてきた環境に影響されたものであることを改めて感じていた。知らないことはコミュニケーションのきっかけにもなるが、罪にもなりうる。表現という、ともすれば生々しい活動の中で他人にふれるとき、何がうまれるのかこれからも考え続けたい。

活動期間後も、これからが、ここからが本番であるという気持ちが続いていた。他のYFFメンバーの方々との交流や、パフォーマンスすることが溶け込んだ生活の中で、今の世界を分け入っていく力を得たようだった。

このような機会をいただけたこと、心から感謝しております。本当にありがとうございました。



鈴木まつり（すずき・まつり）

— 東京／三重（日本）

2001年生まれ。三重県出身。俳優、もの書き。第七劇場『ピノキオ』への出演をきっかけに俳優活動を始める。また、中学時代に太宰治と出会い、以後文学に熱中する。現在、立教大学文学部文学科文芸・思想専修に在学し創作と哲学を学ぶ。主宰を務めるユニット「ツ荘」にて、多様な芸術分野で活躍する同世代と文学を基にした舞台作品を制作。演劇情報サイト「NeSTA」等で劇評・書評の執筆活動も行っている。